

マップを見ながら作業を振り返る児童たち(堺市立東深井小で)

「校区の危険地図」できた

堺市立東深井小の4、6年生6人が校区内の子どもや障害者らにとっての危険箇所をまとめた地図を作った。通学路や遊び場の注意点にとどまらず、道路の段差なども調査。「体が不自由な人には厳しいまち」と指摘しており、日本損害保険協会などが主催する地図コンクールで審査員特別賞を受けた。児童たちは「誰もが安全安心に暮らせるまちに」と願っている。

(浦西啓介)

「東深井危険防犯マップ」(縦6年の東新菜さん(12)らが手が約0・8枚、横約1・1枚)で、けた。6人は小学校の放課後ル



堺・東深井小の6人 お年寄り、障害者らにも配慮

ームを利用する仲間で、みんなで何かを残そうと、昨年の夏休みに調査を始めた。

全員で校区内を回り、学校近くの公園には不審者の出没情報があることや、通学路は交通量の多い道路に面し、歩道を走る自転車も少なくないことなどを確認。横造紙で作った地図に「とび出しに注意」などと書いた色紙を貼っていった。東さんは「毎日通る場所に、こんな危険が潜んでいたなんて」と驚いたという。

調査中、車椅子に乗った人が、歩道に止められた自転車をよけながら進む姿を目にした。それまで「子どもにとっての危険」という視点だけで点検していたが、「体の不自由な人の立場でも見直そう」と新たな見方を加えると、様々な問題があることに気づいた。

自転車の専用レーンがあるのに、違法駐車で塞がれているため、自転車が歩道を走っているところや、点字ブロックの上で駐輪している場所もあった。

また、体の不自由な人が渡り切るには青信号の時間が短かったり、でこぼこで車椅子が通りにくかったりする道路があることもわかった。

児童たちは地図に、「この町はお年より、体の不自由な人にきびしい」と明記。さらに、市にバリアフリー化の推進を求め

る提言も書き込んだ。コンクールでは、地域に密着した取材でまちの特徴をとらえている点のほか、バリアフリー化に向けて市に提言している点が評価されたという。

サポートした放課後ルームの大谷智美・主任指導員は「何度もレイアウトを直して完成させた力作。子どもたちは真剣に街の課題を探ってくれた」と振り返る。

今後、地図をどう活用していくかは未定というが、東さんは「見慣れた場所だからこそ、意識してチェックしなければ危険を見逃してしまうことがよくわかった。少しでも暮らしやすいまちになるように使ってもらえれば」と話している。